

## 魅力ある県立高校づくり懇話会（第1回）議事録

- 1 日 時 平成24年10月23日（火曜日）14時～16時
- 2 場 所 さいたま共済会館5階 505会議室
- 3 出席者 渋谷座長、小杉委員、熊谷委員、中村委員、戸ヶ崎委員、  
工藤委員、山本委員、大出委員、佐藤委員

### 4 議 題

#### (1)懇話会の概要について

（本懇話会の位置づけ、スケジュール等について事務局から説明。了承）

#### (2)これまでの県立高校の活性化・特色化の取組について

（これまで設置してきた特色ある高校について事務局から説明）

**座 長** 事務局の説明について質問はあるか。

**委 員** 特色ある学校の成果として進学実績や中途退学者数の説明があったが、就職や、就職も進学もせず卒業した生徒についてもまとめていたら教えて欲しい。また、生徒が科目を選択して学ぶことは大変意義があるが、一方でこの年代の子どもたちはクラスで課外活動などを通じ、友達関係の中で成長していく部分も大きい。教育委員会として方針のようなものはあるか。

**事務局** 就職率は、再編前と再編後を比較すると概ね向上している。また、就職も進学もしない生徒の割合は、学校によって異なるが再編前と比較して概ね減少している。多くの学校が指標として学力向上と中退防止に係るものを定めていることもあり、今回の会議資料もこのように指標を設定した。また、選択科目が多い単位制の高校でもベースとなるのはやはりクラスルームであり、学校行事を通じて人間関係の構築を各学校で図っている。

**委 員** 多部制定時制の説明で、生徒が社会人になった時に適応できるかが課題というところだったが、生徒を採用した企業側の評価を把握しているか。

**事務局** 企業側の評価は把握していない。今後把握していきたい。

**委 員** 単位制普通科の資料にある「学校外での様々な学修活動の成果を単位として認定することも容易である」をもう少し具体的に説明して欲しい。例えば、震災ボランティアに参加した生徒も多くいるが、こういった活動はどのような単位になるのか。

**事務局** 生徒が通常の授業とは別に、ボランティアやインターンシップ等の課外活動に取り組んだものを教科・科目に位置付けて単位を認定するものである。ボランティアであれば「総合的な学習の時間」や、本県が独自に設定している学校設定教科「彩の国アカデミー」で単位を認定することになる。

**委 員** 資料に平成元年度、平成11年度、平成24年度の中学校卒業生数が記され

ているが、それぞれの年度の入学者選抜の全体の倍率を教えてください。

**事務局** 手元がないので、調べて後日回答させていただく。なお、ピークを迎える前は新しい学校をつくらず、学級増で対応してきた。中学校卒業生数のピークを過ぎた後は増やした学級を戻したが、平成11年度頃にはそのような対応もできなくなってきたため、再編整備が必要となった経緯がある。このように状況に応じて学級数を決めているため、倍率そのものはあまり変わらないと思う。

**座長** 本日は第1回の会議であり、それぞれの委員が様々な思いを持ってこの懇話会に参加していると思うので、自己紹介やこれまでの経験からの話、あるいは事務局からの説明について感じた点など自由に意見を述べて欲しい。

**委員** 埼玉県高等学校PTA連合会の会長をしている。保護者の立場から心配しているのは、生徒数が平成30年頃からまた減少すると聞いている。再編がまたあった場合は通学の問題がでてくるし、学校は地域の核にもなっている。現在1クラス40人で募集をしているが、1クラスを30人にするといった弾力的な運用で、学校を地域に残せないか。

**委員** 市教育委員会の教育長を勤めて3年目である。ずっと義務教育に携わってきた。21世紀いきいきハイスクール推進計画は、生徒数が減る中、県はいろいろな工夫をして魅力ある県立高校づくりをしていると思っていた。

市に県立高校は2校あるが、それぞれ創意工夫をした特色ある学校づくりを行っている。例えば、進学実績を上げるための取組や部活動など特色を出している。ありがたいのは小中学校との連携や地域の活動への参加に積極的で、小学校の水泳指導に高校の生徒が来たり、高校の先生が小中学校の理科の授業をやったり、逆に子どもたちが高校へ行って授業を受けたりしている。先日も、書道部が老人大学の文化祭でパフォーマンスを披露してくれた。特色ある学校づくりの表れだと思っており本当にありがたい。

私立学校との関係もあるが、生徒減が進み、昔はなかなか行きたい高校に行けなかったが、今は中学生の方が選べるようになってきた。更に努力して中学生に選んでもらえる、より魅力的な県立学校をつくっていく必要があると思う。

**委員** 所属は厚生労働省の研究機関であり、労働市場の側からの視点を中心に学校教育を見ている。現在、国の中央教育審議会の高等学校教育部会に参加しているが、そちらでもそういった立場で発言している。

いま、部会で議論となっているのは高等学校の質の保証である。中学校卒業生の98%が高校に進学する一方で大学も入り易くなり、ではいったいどこで質は確保されるのかが課題となっている。今後は高校もどう質を保証するのが問われてくる。

かなりコストをかけて多様なニーズへの対応を図る中で、今は生徒側のニーズに着目しているが、一方で労働市場側のニーズ、要求がある。これから生徒

たちが出ていく社会の側から、高校時代に何を学んだのか、高校を出て何ができるようになったのか問われる時代になってきている。

知識・技能のような基礎能力と、いわゆるコンピテンシーといった態度・志向性まで含めた能力が学ぶもののコアとして挙げられる。先ほどの質問でクラスルーム機能の話をしたのは、そこで培われる生き方、人として何かを成し遂げる力とか意欲が問われているという思いで質問させていただいた。

**委員** 現在、高校長をやっているが、教員になった頃は毎年のように新しい高校ができていた。昭和の時代に2校ほど普通科高校を経験し、中学校卒業生数がピークに達した頃からいわゆる進学校にしばらくいた。補習もやったが今ほど懇切丁寧な進路指導はしておらず、生徒も自立していて少しアドバイスをすると自分で色々と調べながら勉強していた。

平成14年に教頭として勤務した学校は200人が入学するが、卒業に至るのは150～160人であった。やはり経済的理由で辞めていかざるを得ない生徒が多かった。残った生徒はきちんと面倒を見たため、就職しても企業からの評価は高かった。挨拶ができる、体力がある、返事もできる。そういう意味ではある種の特色ある高校づくりに全職員で取り組んできたと思っている。

その後、最初に校長をやった高校は学力的には中堅のごく一般的な普通科高校だった。そのような高校は特色をどう出すかが、どのように生き残っていくかになる。交通が不便だったため、部活動で活性化すれば少し遠くからでも自転車で通学してくれるだろうと考えて、職員と一生懸命に取り組んだ。でも地の利が無いのは厳しい。今は選ばなければ大学に入れることを考えると、多くの普通科の高校はどう特色を出していくか悩んでいると思う。

現在、勤務している高校は定時制があるが、1学年80人で定時制としては大規模である。不登校を経験した生徒が6割いる。どこにも行き場がなくて定時制に入学してくる生徒も少なからずいる。残りは高卒の資格がどうしても欲しいという昔ながらの生徒もいれば、生徒指導で課題のある者もいる。一時期に比べれば退学する生徒ははるかに少なくなってきた。やはり生徒は、高校は卒業したいと思っている。でもその後のことまでは考えられない。

この状況を鑑みると、いかに社会に送り出し、働いて税金を払うようになってもらうかが課題だと思っている。再編整備で定時制の学校が少なくなったが、こういった生徒の面倒をみる学校がないと困った状況になる。本校の教員も進学補習や就職面接など何とかしようとしてよく頑張っているが、指導から外れてくる生徒がたくさんいる。どうしたらいいのか毎日悩んでいる。

**委員** 中学校長を勤めさせていただいている。高校へ生徒を送り出す立場ということで参加しているが、近隣の高校とも中高の連携事業で様々な取組をさせていただいている。また、中学校の校長会で、実際に授業を見る機会があまりない

ため、高校の視察に行き、積極的に足を運んで授業を見ようではないかと提案した。私立高校へ行く生徒が多い地域でもあり、公立高校の魅力を中学校側からもアピールしていく機会にできないかと取り組んでいる。

事務局からの説明を聞いて、21世紀いきいきハイスクールで進めてきた統合再編という主にハード面の取組から、これからは、学力向上や授業の質の向上といったソフト面の取組にシフトしていかなければならないのではと感じた。特色という、他校にない新たな珍しいものとなりがちであるが、地道な事をコツコツやって成果を上げるのもまた特色だと思う。特色というものをどのように捉えて、どうPRしていくかが大きな課題になってくると感じている。

事務局の説明にあった特色ある学校について感じたことを述べると、総合学科については、普通科との違いやそれぞれの学科のメリットが、中学生にまだ十分に理解されていない現状があるように思う。高校はもっと中学校に積極的にPRしてもらう必要があると思うし、中学校ももっと勉強しなければならないと思う。

単位制普通科については、保護者から「単位制の学校は学び直しをやっているだけなのですよ」という声を聞くことが非常に多い。口コミもあるのだろうが単位制の学び直しの部分に対する保護者の評価は高い。学び直しや学力向上のためのきめ細かな指導をしていることをもっとPRする必要があると思う。

多部制定時制は、きめ細かく見てくれる面倒見のいい高校として定着している。非行や不登校など様々な問題を抱えている子どもがいる中で、今はちょっとだらしのない部分もあるけれど将来の可能性に賭けてみたい子どもたちに対しての門を、どのように開いていってくれるのかということを感じている。

また、中高一貫教育は、中高一貫教育をやることによってこのような成果が上がっているというPRをもっと学校現場にすればよいと思う。

あと高校の魅力をどうPRするかという話と関連して、専門学科についても中学校の進路指導で、例えば、あの高校に行けば簿記の資格が取れるという話が出たとき、それが果たして魅力になっているのか、これから先、社会でどれだけ使うのか。PRについては、お互いに勉強し合ってやらなければならない課題がたくさんあると感じている。

**委員** 商業高校の校長である。非常によい経験をしたと思っているのが、再編でなくなった学校に、最後の2年間、勤務させていただいたことである。

行って驚いたのは、もう方向性は出ていたのだが、地域にもものすごい不満の声があったことである。中学校の校長からは、統合の組み合わせについての不満を聞かされた。非常に交通が不便で生徒が集まらない学校だったが、いろんな傷を持っている子が来ていて、あの子たちの学力をどこが保障してくれるのか、行き場が無くなってしまうというのが中学校の先生の意見であった。他の

高校へ行くとしても、バスに乗ることになり遠くなる。経済的にも大変である。

また、伝統校だったので卒業生には立派な方がたくさんいらっしゃったが、皆さん断腸の思いであった。そういう割り切れない思いがあることを知ったのもいい経験になった。高校がなくなるというのはこういうことなのだと勉強した。最後の年は野球部が5人だったため、陸上部の生徒を借りて大会に出場したところ、私立の強豪校と対戦することになって、最後だからと地域を上げてバス4台で応援に行き、1点もぎ取って大いに盛り上がったいい思い出もある。高校がなくなるというのは本当に地域が死んでしまうところがある。

その後、違う高校に行ったが、交通の便が悪く地域の生徒はどんどん減っていくので、外から子どもたちを集めなければ定員は埋まらない。すると結局スクールバスになる。最近バスをやる学校が増えているが、そうしないと駅から遠いから生徒が集まらない。といっても県立なので保護者の受益負担でやるしかない。生徒が少ないところに私立高校が多くあるため、大変である。

現在、勤務している高校は資格取得では全県1位である。しかしながら私たちの地域は事務で就職できない。製造とかになってしまう。ところが東京に行ける地域の高校は、事務でいっぱい求人が来る。子どもたちは割り切れない。こんなに私たち頑張っているのに求人がない。そういう地理的なものも高校にはものすごく影響する。

**委員** 工業高校の教頭である。学校のあるところは昔ながらの工業地域であり、地域密着型の高校を目指そうという方向で、今まさに特色を出そうと商工会議所や機械組合などと提携して、様々な事業をやっている。潜在的な人の需要はあるので、そこに密着して生徒を送っていきたくと取り組んでいる。自分のいる高校は、言い方は悪いが学力的には高くない学校である。それゆえの苦勞もあるが、それでも市内の企業への就職ができてきている。

頑張っているが、行くところがないからうちの高校に来たという生徒も少なくない。我々としては、そこから脱却したいと思いつつやっているが、一方で学力的にそういう状況に置かれる生徒は必ずいるわけで、その生徒がどこに行くのかということにも目を向けなければいけないと思う。非常にジレンマを感じながら日々過ごしている。

せめてもの救いは、地域の応援もあってインターンシップも全員が行けるようになった。かつてはかなり荒れていて、教員も生徒を外に出すことを躊躇していたが、今は改善している。先ほどソフト面の取組という話があったが同感である。全員の学力向上のように何か底上げをしていかないといけない。

もう一つ、保護者の協力がとても大事だと思う。最近、教員に不信感をお持ちの保護者の方も多。御自身の経験なのか、小学校や中学校の段階なのか、どこでどんなふうに関心を持たれているのかはわからないが、親が不信感を

持っているから、生徒も不信感を持っている。保護者の信頼や協力をいただいてやらないと絶対に良くならないということを痛切に感じる。

**委員** 高校で主幹教諭をやっている。採用され、西部地区の新設校に赴任して、近隣の高校を追い越せと様々な取組を行った。自分としてもとても勉強になった。その後、違う高校に勤務したが、2校とも保護者がしっかりとしており手のかからない生徒たちであった。

その後、また違う高校に2年間勤務した。その学校で考えさせられたのは、子どもの力だけではどうしようもない家庭の環境である。親が全く子どもの教育に関心がない。自分の人生優先で、高い腕時計をして高級車に乗っている一方で、子どもは何百円かでパンやスナックを食べていて、すごくショックを受けた。そして今は定時制の勤務であるが、もっと環境は厳しい。そのような中で子どもたち自身もどうしたらいいかわからない。子どもたちを責められない。卒業後の進学や就職もそれぞれ1人か2人で、卒業してもほとんど納税者になっていない。この子たちをどうやって納税者まで育てていくかが課題である。

多種多様な生徒が定時制にはいる。就職ができないため働きながら学ぶ生徒は減少しており、こちらとしてはアルバイトから正規雇用になるよう努力をしているが、まずアルバイトができない。不登校経験者や中途退学者も多い。また、外国籍の生徒が各クラスに4～5人いる。県の多文化共生事業などの支援策を活用して対応しているが、それでもなかなか日本語がしゃべれない。中学校時代は特別支援学校にいて、複数の教員がついていた生徒も入学してきている。学習支援員で学力の低い生徒や外国籍の生徒の面倒を見てあげたいが、実際には特別支援学校から来た生徒に張りついている状態である。前に勤務した高校も大変な学校だと思ったが、定時制に来てこれは本当に深刻だと思った。教職員全員で汗をかいてやっているが、生徒に頑張れといっても、いまは4年後の出口にいいことがないので、そこに目標が見つけられる型ができたらいいと思っている。

また、私の高校の全日制であるが、生徒募集で危機感を抱いている。私立高校は1月に合格発表があるが、県立は3月である。少子化の時代で、親も子どももリスクをとりたくないようで、かなり私立高校にいつてしまった。保護者や生徒の期待に応える、私立高校に行かなくても公立高校でも大丈夫だと安心して子どもを任せてもらえる学校にしていくしかないと思っている。

今、本校は単位制であるが、単位制の一番のメリットは教員が増やせることである。同規模の学校より10人ほど多いと思う。本校は、学力的に同じレベルまたは少し上の学校と比較しても進学はよい。費用をかけているのだから当り前ではあるが、そういったところが単位制の強みである。

とはいえ、教員が十分に汗をかけていないところもある。授業も、やり方次

第で生徒の緊張感や集中力ももっと高められると思っている。少人数だから宿題も出しやすいし、宿題を家でやっている様子を親が見れば「家で勉強するようになった」と口コミで広がっていくと思う。部活動も複数の顧問できめ細かい指導ができると思っている。個人的には今回この懇話会に参加することで色々なことを勉強したいと思っている。

**座長** いろんな方のいろんなお話を聞いたが、今日一番勉強させてもらったのは私だと思う。

大学でも、高校と同じように特色づくりは課題である。先ほど他の委員のお話にもあったが、地道に体力をつける、ソフト面を充実させることがとても大事だと思う。うちは国立大学であるが、やはり地元密着ということを実際に考えなければならない。県立高校の魅力はどうするかという話は、現在勤めている大学の教育の在り方とも関係してくると思う。

もう一つ、皆さんのお話を聞いて、やはり教員そのものの質をどのように確保するかも関わってくると感じた。そろそろ定年を迎える教員の方が大学に入った時は、大学進学率が20%であったが今は55%であり、大きな様変わりがある。しかも現場の課題は非常に複雑多岐になっており、話があったような特別支援を必要とする生徒たちへのケアの方法も理解している教員が求められている。普通学級の教員も同じである。質の高い教員の養成を大学4年間でやらなければならない。私も中央教育審議会の教員養成部会にかかわらせていただいているので、座長ではあるがそのような見地からの発言もさせていただく場面もあると思う。

**事務局** 本日欠席の委員からいただいている御意見を紹介させていただく。

「事務局から説明を聞いた上で私の感じたことを、特に社会で働くという観点から2点述べさせていただく。一つ目として、不況下ということもあるが、現代ほど若者が自立できていない時代は今までなかったのではないかと感じている。知人から頼まれることもあり、これまで多くの若者を会社で受け入れてきた。以前は独身寮を持っていたので、寮に住まわせて面倒を見てきた。彼らの寮での生活ぶりを見てみると、腰を据えて仕事に取り組めない、遊びに気が行ってしまふ様子が目に付いた。寮のルールを守れない者もいた。そのような状況を直接親御さんに伝えたこともある。学生から金銭を貰って働くことになったときに、意識の切り替えができていないと感じている。新入社員に言ったことがある。『これまであなたたちはお金を払って勉強してきたよね。もし、あなたがうちの会社で勉強したいと思っていて、会社にお金を払ってくれるなら、私はこの会社の社長だけど、あなたにお茶を入れるよ。』

二つ目として、高校での教育は実社会と向き合ったものであって欲しいと強く思っている。私は昔、短期間だが、中学校の臨時教諭として勤務したことが

ある。その時、感じたのは、暗記の知識は忘れてしまうと全く役に立たない。けれども、自分自身で体験や操作をしたり、社会の実際の事例を元に理解したことは、しっかりと身に着くということだ。授業でもそのような場面になると、それまでぼうっと遠くを見ていたような子もいきいきとしていたことを今でも覚えている。ぜひ社会で実際に活躍している民間の方の授業を増やして欲しいと感じている。」

**委員** 先ほど保護者の責任のお話があったが、私も同じことを感じている。例えば、コンビニで物を買って座り込んで食べている、バイクで暴走し警察に補導される。その時、学校に電話がきて先生が警察に行くケースも多々あるようだ。制服を見れば高校がわかるので学校に連絡が来るようだが、そこまで先生がやらなければいけないのかと思う。本来なら、これは家庭教育の部分である。保護者の立場から言うのもおかしいが、あまりにも面倒見が良すぎるのではないか。やはり家庭責任は家庭責任ということで考えていかなければならないと思う。通学の様子を保護者が見守っている、保護者が頭髪服装検査をやっている高校の話も聞いているが、生きる力の原点の家庭教育が今苦境に立たされている感じがしている。

特色ある学校づくりも必要であるが、家庭教育がきちんとされていないと学校づくりも難しいのではないかと思う。多様な生徒に対応するとしても、あまりに多様性を追求し過ぎるとよくない方向に行くのではないかと感じる。

**委員** 進学校と言われている学校の立場から言うと、昔は授業が終われば生徒は帰って家庭で勉強したが、今は学校でやらせるしかない。家庭で勉強できないと言う。親も学校で勉強する機会をつくって欲しいと言っている。自分の高校では、朝は7時半から放課後は午後8時まで校舎を開放して勉強させている。本来なら家庭でやっていたものが、学校が面倒見ざるを得ない。全部家庭ですよと言ってしまうと、進学への保護者の期待に応えられないということになる。朝から夜遅くまで、土日も夏休みも補習が入っており、教員の忙しさはあまり変わらない。「手間をかけて手間がかからないようにする」を合言葉に、入学段階から生徒の自立を促す取組もやっており、変わってきた部分もあるがなかなかうまくいかない。

**委員** 学校以外の人たちの支援の手を借りることも必要だと思う。現状としては家庭でできていないところがあるのは明らかだが、家庭を変えるのはそう簡単にできることではないので、公的なものが一番影響を与えることができる学校が最後のセーフティネットになってしまっている。あれこれ全部やらなければならなくなって、先生方が大変苦しい状態であるのは本当に分かるが、学校の先生が本来のことができるようにするために、他の省庁の事業やNPOを組み込むなど、社会的資源を活用し学校の中に取り入れていければと思う。学校が本

来の学校らしくあるために、社会全体の力を学校のサポーターにできればと思う。

(以上)